

講演



第 36 回 全国大会にあたって

——舶来指向について——

大 野 豊†



皆さま朝早くからご苦勞までございます。第 36 回全国大会を、この慶應大学で盛大に開催できましたことを運営委員の皆さま方、また慶應大学の関係者の皆さま方に厚くお礼申しあげます。恒例により会長挨拶ということで、なにか話さなければならないわけですが、私、実はこの 3 月で京都大学を退官いたすことになっておりまして、私のやってきた過去のことを少し振り返ってみる機会がございました。いろいろ昔のことを思い出したり、いくつか自分の書いたものを拾い出したりしている内に、その中からちょっと気がつきましたことをお話ししたいと思います。古い話で大変恐縮ですが、もし皆さま方にあまり関心がなければ、お耳をふさいでいただいて結構ですが、特にこれは若い方々に聞いていただきたいわけです。

私は京都大学にほぼ 16 年前に参りましたが、それから間もなく、日本のコンピュータ・メーカがいろいろ商売をするに当って、容易にアメリカに追いつけないため、結局 IBM コンパチブルな機種をつくるという戦略を立てようということが出て参りました。戦後確かに私の年齢位までの人たちが、我が国のコンピュータで言えば第 1 世代の人たちが、いろいろ努力したが、アメリカにそう簡単には打ち勝ちそうもなかったわけです。特にソフトウェアの面で立ちおくれが著しいということで結局日本のコンピュータ産業を盛んにするためには、やはり上記の路線が必要だろうということは誰も納得したわけです。その結果現在では、かなりいい成果を出してきたということは確かなわけでございます。その意味でその選択は、我が国として大変よかったといえますが、当時私は一方ではある危惧の念を持っておりました。それはなにかというと、ある意味では、物真似するわけですから、物真似が定着した時に一体コンピュータについて基本的に考えて創る姿勢、あるいは自分ではじめからなにかを作出す姿勢が失われるのではないかなという危惧の念

です。その頃私は研究者という立場にいたものでから、ますますそういう感じを深くして、これから研究がどうなるかということを心配したわけです。それにもかかわらず、世界の中でも日本のコンピュータは特に素晴らしい進歩を遂げたわけですが、基本的には要するに外国でやっているものを見ながらそれをさらに発展させるということには変りなくて、本質はなにかというところを通り過ぎて、次のところを考えるだけで手っ取り早く追いついてきたといってもよいわけです。このようなやり方が身についてしまったために、たとえば OS にしてもその他のことでも、基礎的な考えや概念で日本が提案したもので世の中に流布されるものがあまりない。最近やっと TRON その他が出てきて、日本製だということで騒がれておりますが、むしろ例外といってもよいわけです。多少恐れていたことが、現実となってきたわけで、これから、そのつけを返す努力は大変なものと考えるわけです。

それからもう一つのお話は、実はやはり 10 年近く前の話ですが、ある大きなメーカの研究所で講演したときのことですが、当時コンピュータ・システムのあり方として TSS が非常にすぐれた考え方の下に十分実用になってきた段階でございましたが、その次のシステムはどう考えるべきだろうかということについて私見を述べたことがありました。その当時は、超小型コンピュータが大型コンピュータとは独立に急速に発展して実用になってきた段階でありましたので、将来は多分そういうもののネットワーク化が行われ、その上にホストとして大きなコンピュータがサーバとして乗るというような体系が重要になるのではないかなということをお話したことがありました。その時はなんと言いますか、冷笑みたいな、というような雰囲気がございます。あまり関心を持ってくれなかったように思います。これは別に、現在システムの形態は大体私が前に言ったような方向に向っていると自慢するわけではなく、利用者のニーズをとらえて何が基本的に必要かを自主的に考えていたら、もう少し異った反応があったのではないかと思います。やはり目は海の向うを

† 本学会会長 第 36 回 全国大会の会長挨拶として行われたものである。

昭和 63 年 3 月 16 日 於慶應大学

向いて物真似する対象をさがすのみ、というくせが定着したあらわれではないかという気がしております。

それからもう一つの話は、最近私自身が通産省のプロジェクトのシグマ・システムに関係しておりますが、これは、UNIX を拡張した OS を作りまして、それをもとにして、ソフトウェアの開発環境を全国的なネットワークとして構築し実用化しようというようなことで、現在仕事が相当順調に進んでいるわけでございます。このプロジェクトの初めの頃に、UNIX の二つの系統の AT&T 版と BSD 版のいずれを採用するかで、いくら論争もあったようなわけですが、そのときにやはり気になったものですから、うちの研究室の若い学生で UNIX を使って仕事をしている諸君に、その点の意見もずい分聞いてみました。うちの学生諸君は「どちらでも本質的には問題ないでしょう。だからどちらを取るかは姿勢あるいは好みの問題だけです」というようなことを言ってくれたので意を強くしました。世の中には、そう柔軟ではなくて、自分が今使っているものを偏愛したり、それ以外は拒否するという人も案外に多い。また、外国製だから良くて、日本で考えたり手を入れたものは嫌いだ、という感情、好き嫌いで意見を言う人がおります。使ってもみないうちから ΣOS は嫌いだ、というわけです。そういう意見がずい分聞こえてきたわけですが、そこに本質的なところが重要かということを考えた議論だったかということが、どうも私にはよくみえなかったんです。そういうことを考えると、やはりわれわれ日本人は、どこか海の向うで基本的なことは考えてくれて、その先を考えればよいという時代を過ごしてきた人たちが多くて、本当に自分たちは基本的になにが必要かと、あるいは向うの人が考えていた基本的なところはなにかを本当に理解してやっているだろうかと疑わしくなり、どうも少し問題があるのではないかというような気が日頃していたわけでございます。

実はきょう渋谷から電車に乗りましたら、私共の大先輩の高田昇平氏に、電車の中でお会いしてお話をしていましたら、高田氏はもうよいお年にもかかわらず、今 OS を作っております、というお話をしているのを見ました。それで OS の原点に返って、なにが基本か考えた上で、非常に簡単な小さい OS を考えているということをお聞きしまして、大変敬服したんですが、同時に我が国の第 1 世代のコンピュータの研究者の方々が、とにかく自分たちになにかが必要かということを基本的に考えながらやるという姿勢がまだ残っておられて、そのまま継続しておられているのは、

大変すばらしいことではないかと思います。電車の中で高田氏のお話に合つちを打ちながら慶應大学まで来たわけでございます。最近いろんな摩擦の問題で、やはり日本人としてもっと基本的なところを考えなければならぬ雰囲気が出てきて、学会の研究発表も、そういうような方向の研究がだんだん出てきたということは非常に喜ばしいことですが、まだまだ十分とはいえないのではないのでしょうか。

そこでもう一つの気になっているのは、情報の問題はとも理論だけでは片づかないところがあるということです。たとえばこのワークステーションが好きだと、なぜ好きかということについて、とことん追究しないで、ただ好きだと、好き嫌いというところが非常に出てくる。さっきの UNIX の論争も好き嫌いの問題で、基本的になにかというところはおろそかになっているのではないか。ですから、好きは好きでよろしいのですが、それはむしろ理論的じゃなくて、感じの問題だということを心得て言ってくれた方がよい。そこに、あたかも高邁な理論があるような言い方をされますが、掘り返してみるとそうでもないところがしばしばあります。その辺のところを若い方々がこれからよくお考えいただき、これからの日本の情報技術を大いに発展させていただきたいとお願いする次第です。

結論としては、われわれ、まだ舶来指向というのが抜けているわけじゃなくて、やはり、あちらのほうのものが、なにか本質的によさそうだという感じをもって自らの評価能力を放棄しているのではないか。そこら辺のところを、もう少し掘り下げる必要があるだろうということ。それからなにか新しい方向が出たときに、新しい方向に対して、今自分の立場だけで考えないで、もう少し頭の転換をして、広い立場でものごとを考えたら、新しい方向に対する評価が違ってくるだろうと思います。それからもう一つは、何が枝葉で何が根本かということをよく考えていただきたい。また、これは産業界にも言いたいことは、やはり商売になるということが前提ですが、今の日本の立場からすると、商売になるだけでいいだろうか、ということがあります。そのところで技術の基本はなにかということをお考えいただけますと、商売は二の次にしてやっていただかなければならないところが、たくさんあるんじゃないかという気がします。余計なことかもしれませんが、お考えいただければと思っております。

大変とりめないお話で申し訳ありませんが、これで会長挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。